

電波の影から (1953年2月号)

電波法違反の疑いとかで帝国電波技術課長の三橋正雄が捕まって業界をアッといわせた。帝国電波はひと頃ポータブル受信機に力を入れていてメーカーが技術交換のために作った電池式受信機協議会に加入しているが、この三橋君、あまり出席が悪いので“欠席裁判だが、ヤツを委員長に選挙してしまエ”という強硬論も出て危く委員長になりかけたという話も残っている。“技術が優秀だから委員長に……”という伝説は誤りだそうだ。

ところが面白いことには、電池式受信機協議会は新年から電波兵器の研究に重点を置いて行くことになった。今迄はポータブルとかポケットとかを中心にして研究を進めてきたものだが、保安隊⁽¹⁾で使う携帯無線電話機はほとんど乾電池を電源としており、ポータブル受信機の技術と大いに関連があるというわけ。この会で論争の中心になっているのは真空管のフィラメント電流と電池の壽命の問題。どっちが悪いのかはわからないが、電池があまり保たないことは確からしい。真空管メーカーは“オレのところは輸入したフィラメントを使っているんだから確かなものさ”とやれば、電池屋さんは“乾電池は米軍に大量に納めているし、品質もアチラさんから保証されているんだ”とやり返す有様。この論争、電波兵器になってからもどう展開されることやら。

この携帯無線機がいよいよ保安隊から大量に発注される。SCR、信号隊無線機とでもいうのが大部分で、チョイと肩にかけられる歩兵用のハンディー・トーキー、背^{のう}囊式のウォーキー・トーキー、ジープ用のFM無線機など。すでにメーカーで気の早いところは試作を完成した。ところが、これらの無線機いずれも米国式規格だが、現在米国の第一線部隊では使っていないものばかり。目下メーカーが試作しているのはいずれもミニアチュア管を使っているが、米国の中はサブ・ミニアチュア管に移ってズッと小型になっているのだそうだ。旧式電波兵器を苦心して試作しているんだから全く淋しくなってしまう。

これではイカンとみてか東芝、日本電気、神戸工業⁽²⁾などではサブ・ミニア

⁽¹⁾自衛隊の前身。朝鮮戦争を期にアメリカが1950年に日本に作らせた「警察予備隊」が1952年に「保安隊」と改名した。この保安隊の英語表記は、National Safety Forces（国家保安軍）という。実質的には軍隊といえる。

⁽²⁾「テン (TEN)」真空管を製造。

チュア管の試作研究を開始した。遅まきといえばいえるが、なにしろ米国でさえ民間用としては補聴器ぐらいしか使いみちがないというのだから、非武装日本が作ってみたところで何にもならないのが当り前の話。

メーカーも“作ろうと思えば何時でも作ってみせるよ”といっていたが、試作を始めたところをみるとやはりご時世というのでしょうかナ。本格的に生産に移るのは今年の秋頃になるそうだから、アマチュア諸兄は今から補聴器の研究でもして備えて置くこと。ポケット・ラジオも新分野が開かれることになりそうだ。もちろんこれで無線誘導装置から航空無線機まで各種電波、電子兵器の生産も可能となる。話が何となく物騒になってきたから、この辺でTVの方に眼を転じてみよう。

“2月から……”これがTVメーカーの相言葉のようになっていたものだが、早いものでその2月がもうやってくる。NHKは2月から本格放送を開始⁽¹⁾するというから、待望のTV時代がやってくるわけだ。各メーカーも2月を目標に生産準備を進めており、その態勢もどうやら完了に近付きつつある。各社の技術導入計画もほとんど出揃った形であり、提携をした外国メーカーを見てみると、米国のRCA、ウェスチングハウス、ゼネラル・エレクトリック、デュモント、トランスピジョン、レーセオン、オランダのフィリップスなど、大所がズラリと列んだ盛況だ。

いわゆる正力テレビ、日本テレビ放送網会社は米国RCAから放送機を輸入する計画で、免許もすでに下り入荷を待つばかりとなっているが、この放送機大分延着して5、6月頃になりそうだという。NHKにはいまだ本免許も予備免許も出ていないが、国産で三大都市中継網を完成してしまった。後のカリが先になるといったところ。消息筋の話では米国のTV局はほとんどが5kWでRCAも正力テレビの10kWは始めてとかで、大分手を焼いているんだそうだ。この点東芝と組んで極秘裡に大阪生駒山の7kW機を完成したNHKのお手なみは見事であった。まず外国技術依存の正力テレビの黒星とみていいが“やっと着いても

⁽¹⁾1952年7月いち早く「日本テレビ放送網」が予備免許を受け、同年12月NHKが予備免許を受けた。本放送は、1953年2月1日午後2時からNHKが開始した。日本テレビ放送網は、遅れて8月28日に放送を開始した。

RCA から技術者がやってくるわけでもなし、持てあますに決ってるさ”とヘラズ口を叩く者もある。

TV 時代近しとあってか昨年の年末は街のテレビ⁽¹⁾を囲む人垣が目立ってきた。なにしろ 1 インチ当りセットのお値段が 1 万円⁽²⁾とあってみれば手が出せるわけがなく、どうしても立見をしなければならなくなるのが大衆の運命だ。八木秀次博士は“小型 TV 受像機を大量生産して安くせよ”と叫んでいたが、いくら安くなったとしても買えないものは買えない。大衆からいわせれば、大型受像機を沢山作って、街頭でタダでみせてくれた方がいいに決っている。ところが黒山の人垣はその筋の眼の光るところとなって“道路交通法違反ではないか”という説が有力となってきた。果して受像機がタイホされるかどうかというのはチョットしたものである。

12月初め、深夜の実験放送で味をしめた NHK、今度は立体放送⁽³⁾をプロに組み込んで 12 月 20 日の土曜コンサートに登場させた。一軒で二台のセットを持っている家なんかそうザラにあるもんではないが、好きな人だったらお隣りのを拝借すれば OK となる。いくら良いセットを持っていたところで、お隣りのが並四のマグネチック⁽⁴⁾なんかだったらガッカリ。だから抜け目のないメーカーはこれに便乗して“一軒の家にラジオ二台”運動を展開したら、などという肚でいるから油断ができない。

このデンで立体 TV なんかはどんなものだろうか。一軒で TV 二台なんていう贅沢な時代にお目にかかるてみたいもの。

昨秋英国に渡って、恒例のレディオ・フェアを見て来たという人から話を聞いた。一口でいってしまえばキャビネット・ショウだそうで、案外つまらないらし

(1) 街頭テレビ。繁華街には、テレビが設置されて、人々が群がってみていた。日本テレビ開局時には、55 箇所だったが、最終的には 278 箇所になった。力道山が活躍するプロレス中継が大人気で、1954 年、力道山・木村政彦対シャープ兄弟戦では、新橋駅西口広場の街頭テレビには 2 万人の群集が集まつたといわれている。

(2) 当時の大卒初任給は 8000 円くらい。

(3) NHK は第一放送と第二放送を使い、左右の音源を別々に送信して 2 台のラジオで受信すると、立体的に聞こえるプログラムを放送した。当初は音楽が主であったが、後には、立体放送による臨場感を重視した「架空実況中継」なるものを放送した。「関が原の戦い」では、左右から豊臣方と徳川方の鬨の声などが聞こえたりした。

(4) マグネチック・スピーカーのこと。ダイナミック・スピーカーに比べて音質が悪い。

いが、見世物には水中 TV や投写型セットなどがあったとか。一巡りしてくるとカタログが持ち切れなくなるそうで、ブロック別になっているメーカーの展示場の中にはバーもできていて、スコッチのいいやつを飲ませるんだから、われわれが考えている展覧会のスケールとは大分違うらしい。

ついでに海外の話をもう一つ。花のパリから帰えってきた人、探し歩いたが TV 受際機はある電気屋に一台あったのを見ただけだったとか。最高水準の標準方式を採用したフランスの TV は事実、眼覚しい普及はみせていらないらしいが、これは都市美観のためにアンテナを屋外に出さないから見つからないのだそうだ。^{さすが}流石はパリだと感心したが、これはパリだからいえるのであって、東京の場合は囲りがキタないから返ってヤギアンテナなんかは見觀をそえる^{おそ}惧れがある。もっとも日本でも聴視料 200 円を節約したい方は大いにパリを見習う必要があろう。(S)

この PDF は、
『無線と実験』1953 年 2 月号
をもとに作成した。
PDF 作成に当たり、脚注を付けた。
ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを
ラジオ温故知新
<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/index.html>
に、
ラジオの回路図を
ラジオ回路図博物館
<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>
に収録してある。参考にしてほしい。